

優秀賞

学校法人明昭学園 岩倉高等学校

活動の内容 (概要)	総合的な探究の時間と課外活動を連動させ、学校内外で学びを深めるキャリア教育を実践。生徒は社会課題に基づく企画立案や商品開発、地域イベントへの出店を通じ、実用的な学びを深めている。企業や自治体をはじめ多様な外部機関との連携により、実社会と繋がる学習環境を整備。また、生徒の興味や成長段階に応じた「受動型－開拓型Stepモデル」を導入することで、個々に応じた挑戦機会を提供し、主体性と多様なキャリア観を育てている。
審査委員コメント	<p>・活動継続年数5年、教育関係機関24校、行政・地域社会・産業界など38団体との連携による非常に規模の大きな取組を継続してきた努力に深く敬意を表する。自らの将来を主体的に描くキャリア教育を推進し、生徒一人ひとりの成長段階や個性に応じたペースで活動を展開している点からも、生徒が中心となる教育実践であることがうかがえる。また、生徒の感想には信頼関係の構築や自己肯定感の向上が見られ、取組が確かな成果を上げていることがよく伝わってきた。</p> <p>・一人ひとりの成長段階に応じた「受動型－開拓型Stepモデル」の導入は非常に興味深い。主体性を育むための設計として「Do(まずやってみる)」「Check(どう感じたか)」「Action(次に何をするか)」「Plan(どう実行するか)」というDCAPサイクルが、無関心な生徒も巻き込みながら実践へと導いている点は素晴らしい。また、「千羽鶴活動」を通じて地域全体が教育資源となり、学びの好循環が生まれている点も見事である。今後1,000を超えるプロジェクトの発足を目指す中で、現在の50のプロジェクトがどのような関係性を持っているのかを知りたいと感じる。これからも生徒が多様な経験を通じて社会に羽ばたく力を身につけていくことを心から応援する。</p> <p>・岩倉高校の取組からは、生徒を信じて任せる先生方の姿勢と、地域の中で学びを深めていく温かい空気を感じる。授業と課外活動の両面で探究が進み、特に「千羽鶴活動」では行政や企業、地域の方々と協力しながら、生徒が自ら社会に関わる姿が印象的である。支援される側から支える側へと意識が変わっていく過程には学びの本質があるように思う。先生方は生徒を先導するのではなく寄り添いながら背中を押しており、その関係性が実践を支えていると感じる。こうした活動が学校文化として定着しており、生徒一人ひとりの思いや行動が地域を動かしているように思う。今後も生徒が社会の中で自分の可能性を信じ、誰かのために行動できる教育として広がっていくことを期待する。</p>
連携・協働している 機関や団体、組織	<p>教育関係者(学校、教育委員会等)</p> <p>【大学】 亜細亜大学 大阪産業大学 国際武道大学 国士舘大学 昭和女子大学 女子栄養大学 桐蔭横浜大学 東京工科大学 東洋大学 日本工学院 日本体育大学 武蔵野大学 琉球大学 早稲田大学</p> <p>【高校・専門学校】 上野学園 瓊浦高校 女子美術大学付属高校 ドルトン東京学園 名古屋工業高校 野田学園 星の杜中学校高等学校 山本日本語学校 龍山鉄道学校(韓国) 麗澤中学高等学校</p>
連携・協働している 機関や団体、組織	<p>行政(首長部局等)や地域・社会(NPO法人やPTA団体等)、産業界(経済団体や企業等)</p> <p>【行政】 台東区役所 茨城県古河市役所 栃木県塩谷町役場</p> <p>【地域・社会】 日本赤十字社 公益財団法人シーセフ 公益資本主義推進協議会 特定非営利活動法人 耕房”輝” NPO鳥蔵柳浅 公益財団法人生命保険文化センター 一般社団法人聖母 NPO法人夢のカタチふあーむ 903シティファーム推進協議会</p> <p>【産業】 リコージャパン株式会社 キリンビバレッジ株式会社 ソフトバンク株式会社 ライオン株式会社 花王カスタマーマーケティング株式会社 明治安田生命相互保険会社 株式会社ブリヂストン 株式会社JTB 株式会社三井住友銀行 株式会社マザーハウス ボーダレスハウス株式会社 株式会社クレディセゾン セゾン投信株式会社 株式会社アトレ 東武トップツアーズ株式会社 株式会社紀伊國屋書店 有限会社神田興産 アイリスチトセ株式会社 エデュフューチャー株式会社 株式会社ジャパンファームプロダクツ 株式会社クルックフィールズ ミラッツ株式会社 ネクスト株式会社 東日本旅客鉄道株式会社 株式会社JR東日本クロスステーション タクトピア株式会社</p>

活動開始の経緯	<p>岩倉高等学校では、多様な経験を通して生徒が自己理解を深め、自らの将来を描けるようになるためのキャリア教育に注力している。特に、SDGsや地域課題といった「今まさに社会で起きていること」を他人事ではなく当事者として捉えられるようになるため、実社会とつながる学びが不可欠であると考へてきた。しかし、授業内での探究活動には時間的制約があり、より深く主体的な学びの機会を求める生徒の声が上がっていたことから、課外活動「千羽鶴活動」が発足し、総合的な探究の時間と課外活動の両輪で学びの深化を図るようになった。</p> <p>2020年度には、企業との本格的な連携の第一歩としてリコージャパンとのオンライン会社見学授業を実施した。この取組を起点に、生徒の関心は講話や映像での学びに留まらず、実践的な社会参加へとつながっている。ソフトバンク、麒麟ビバレッジ、ブリヂストンなどの大手企業をはじめとする幅広い業界の企業に加え、自治体や公共団体とも連携し、生徒が主体的に取り組む50のプロジェクトへと発展している。</p>
活動の内容	<p>協力性についての具体的な取組、工夫している点など</p> <p>本校のキャリア教育は、行政・地域団体・企業など多様な機関と連携し、それぞれの強みを活かしながら「共に学び、共に創る」パートナーシップのもとで展開されている。たとえば、農業団体や地域住民と協働したマルシェでは、生徒の自由な発想による企画・運営が実施され、福祉や農業といった社会課題への理解を深める機会となっている。また、福祉事業所との商品開発では、生徒の提案が実際の製品に反映され、「価値を共創する関係」が築かれている点が特徴的である。</p> <p>これらの活動は、生徒が最初から能動的であったわけではなく、体験を通じて課題に気づき、地域や企業を巻き込んで動く姿勢が育まれていくという、主体的な成長を起点としたプロセスを持っている。さらに、課外活動である「千羽鶴活動」では、教職員、行政(台東区役所)、企業(JRや地元企業)などが連携し、部活動等に所属しない生徒も含め、多様な生徒に社会参画の機会を提供している。活動を通じて生徒は、地域との協働の中で自らの行動が社会に影響を与える実感を得ており、「支援される側」から「地域の担い手」への意識の転換が見られる。こうした多機関との連携により、地域全体が教育資源となる学びの好循環が創出されている。</p> <p>継続性についての具体的な取組、工夫している点など</p> <p>本校のキャリア教育における諸活動は、単発のイベント等に留まらず、活動の目的や方向性を明確に設定して関係者と共有することで、持続可能な仕組みとして継続的に取り組まれている。例えば、コロナ禍で生まれたオンライン国際交流プロジェクトでは「日本語を使う機会を失った海外の学生を支援したい」という課題意識から、生徒が自ら企画し実施まで担った。こうした明確な目的が活動の軸となり、関係者の理解と協力を得やすい構造が築かれている。</p> <p>また、生徒の成長段階に応じて参加形態を広げていく「受動型－開拓型Stepモデル」により、教員が企画・運営したものに生徒が希望して参加する受動型から、生徒自ら課題感を持ち、外部を巻き込みながら企画・運営する開拓型へと段階的に移行できる仕組みとなっている。この仕組みにより、学校全体で生徒が成長に応じて主体性を高めていけるような設計が組み込まれている点も、継続性の基盤となっている。</p> <p>さらに、活動後には毎年振り返りと改善が丁寧に実施されている。地域マルシェなどでは、前年の課題を分析し改善するサイクルが定着している。こうした改善プロセスにより完成度が年々向上するとともに、そこを起点に「マラウイコーヒープロジェクト」をはじめとする複数のプロジェクトが派生し、活動の幅も拡大している。今後は海外視察なども計画されており、新たな中長期的ビジョンのもとで継続性のさらなる強化が見込まれる。</p>
	<p>実践性についての具体的な取組、工夫している点など</p> <p>本校では、地域や社会と接続した「実践の場」を多様に提供し、生徒が段階的に挑戦できる構造を持っている。中でも特徴的なのが、前述した「受動型－開拓型Stepモデル」であり、教員主導から始まり、徐々に生徒の主体性が育つ設計となっている。</p> <p>やりたいことが明確でない生徒には、「まずやってみる(Do)」から始め、「どう感じたか(Check)」「次に何をするか(Action)」「どう実行するか(Plan)」へとつなげる「DCAPサイクル」によって行動を促し、経験を通じて興味や関心を言語化し、次の実践へと導いている。また、全教員がいつでも生徒の情報を確認できる体制が整っており、デジタル版キャリア・パスポートの活用や交換ノートを通して、生徒の挑戦や成長が可視化されている。それにより、生徒一人ひとりに応じた支援やフィードバックが可能となっている。</p> <p>さらに、障害者支援団体やNPO法人との連携により、生徒は地域課題の現場で商品開発や販売、イベント運営などを担い、交渉・意思決定を含む実務を体験することで、社会的責任や役割意識を育んでいる。単なる体験や知識の習得にとどまらず、現実の課題に触れ、行動を通じて学びを深める「実践を通じた学び」ができており、実社会で必要な対人スキルや課題解決能力を育む機会にもなっている。こうした取組を通じて、生徒が社会の一員として成長するキャリア教育の土台が築かれている。</p>

発展性についての具体的な取組、工夫している点など

活動の内容

本校のキャリア教育における諸活動は、単発のイベント等に留まらず、活動の目的や方向性を明確に設定して関係者と共有することで、持続可能な仕組みとして継続的に取り組まれている。例えば、コロナ禍で生まれたオンライン国際交流プロジェクトでは「日本語を使う機会を失った海外の学生を支援したい」という課題意識から、生徒が自ら企画し実施まで担った。こうした明確な目的が活動の軸となり、関係者の理解と協力を得やすい構造が築かれている。

また、生徒の成長段階に応じて参加形態を広げていく「受動型－開拓型Stepモデル」により、教員が企画・運営したものに生徒が希望して参加する受動型から、生徒自ら課題感を持ち、外部を巻き込みながら企画・運営する開拓型へと段階的に移行できる仕組みとなっている。この仕組みにより、学校全体で生徒が成長に応じて主体性を高めていけるような設計が組み込まれている点も、継続性の基盤となっている。

さらに、活動後には毎年振り返りと改善が丁寧に実施されている。地域マルシェなどでは、前年の課題を分析し改善するサイクルが定着している。こうした改善プロセスにより完成度が年々向上するとともに、そこを起点に「マラウイコーヒープロジェクト」をはじめとする複数のプロジェクトが派生し、活動の幅も拡大している。今後は海外視察なども計画されており、新たな中長期的ビジョンのもとで継続性のさらなる強化が見込まれる。

その他

千羽鶴活動－生徒の“生きる力”を育む、本校探究活動の象徴－

本校の理念は、仲間とともに主体的に学び、考え、創造し、そして行動していく力を育てることである。その実践の中心にあるのが、生徒が自らの手でつくり上げる千羽鶴活動である。「千羽鶴」という名前には、想いを込めながら一つひとつ折り重ねる折り紙のように、1,000を超えるプロジェクトを発足させ、生徒が様々な経験を通じて社会に羽ばたいてほしいという願いが込められている。

この活動は、部活動や学校行事、委員会活動に参加できていない生徒にも居場所をつくり、主体的に学ぶきっかけとなる貴重な場である。学校生活に対するモチベーションが上がりにくい生徒にとって、自分の興味を見つけ、それを深める機会は自己効力感を育む大切な時間である。

例えば、上野駅前のパンダ橋マルシェや秋葉神社のマルシェへの出店では、生徒がデザインしたパッケージの商品を実際に販売し、リアルな顧客の声に触れることができた。また、外国人観光客向けの折り鶴コーナーの運営では、多様な文化とふれあいながら自らの言葉で活動を伝える体験を行った。自分とは異なる多くの価値観に触れることで、企画力や課題に対する新たな視点の気づきにつながっている。

さらに、これらの体験は生徒にとって「自分にもできる」「次はこうしてみたい」といった前向きな気づきにつながり、単なる活動にとどまらず、人生の中で「生きる力」を培うきっかけとなっている。

	<p>【生徒の千羽鶴活動を支援した教員】 内気だった生徒が大きく成長する姿に立ち会った。当初の彼女は、与えられたことには誠実に取り組む一方、人前に出るのが苦手な自主性に乏しいタイプであった。しかし、プロジェクトを通して何度も発表を重ねるうちに、人前で話す自信を少しずつ身につけ、最終的には教員に頼らず率先してプロジェクトを牽引できるまでに力をつけた。「自分を変えたい」という強い思いで一歩を踏み出し、大きく成長した彼女の姿は今も心に深く残っている。</p> <p>【千羽鶴活動をしている生徒の担任】 千羽鶴活動を通じて大きく成長した生徒の中で、特に印象に残っている生徒がいる。彼は「やりたいこと」が見つからず、無気力な学校生活を送っていた。そんな彼があるきっかけから農業に関心を持ち、「農業体験を企画したい」と自ら提案した。企業への連絡や参加者募集を主体的に行い、さまざまな課題にも真正面から取り組んだ。結果として30名以上の参加者を集め、当日の運営も見事にやり遂げた。この経験が自信となり、今後の進路についても自らの「やりたいこと」を自信を持って言語化できるようになった。</p> <p>【キャリアカウンセラー】 千羽鶴活動では「社会に貢献することの楽しさや喜び」を実感する生徒が数多く生まれている。また、社会人との関わりを通して自分とは異なる視点や考え方に触れることで柔軟な発想力も養われ、学習姿勢や物事の捉え方にも前向きな変化が見られる。その成長ぶりに先生方も驚きと喜びを感じている。</p>
<p>学校現場の評価・感想・コメントなど</p>	<p>【千羽鶴活動をした生徒の感想】</p> <p>○3年 T.N さん 私は千羽鶴活動によって「自分が学校で何をしているか」を周りに胸を張って話せるようになった。部活をやめてしまい、何もせずに過ごしていた放課後の時間に価値を生み、さまざまな経験を得ることができた。また、地域や外部の方々と連携してつながる楽しさを知り、人の輪が広がることで多様な考え方や生き方を知ることができたことも貴重な学びとなった。</p> <p>○3年 Y.I さん 最初は外部の人と協力して進めることに緊張していたが、打ち合わせを重ねるうちに「外部の人」ではなく「仲間」として一緒に取り組めるようになった。また、商品のパッケージや販売方法も自分たちで考え、仲間と相談しながら準備を進めた。イベント当日は初めての販売活動で緊張もあったが、先輩のアドバイスを受けつつ自分なりに挑戦し、成長を実感するとともに仲間との信頼関係も深めることができた。</p> <p>○3年 M.I さん 外部連携を通じて異なる視点に触れ、多様な考え方を学ぶことができた。自分の意見を伝える難しさも感じたが、経験を重ねることで自信が付き、表現への苦手意識を克服できた。さらに千羽鶴活動を通じて気づきを深め、考えることの重要性を学んだ。</p> <p>○3年 Y.S さん 私はスクールファームや外部販売部に所属しているが、外部の方と関わることで専門的な知識に触れることができた。また、さまざまな考え方に触れることで自分自身の価値観を広げることができた。高校生のうちにこのような貴重な経験を積んでいることを嬉しく思う。</p>
<p>関係諸機関からの評価・感想・コメントなど</p>	<p>○台東区役所 都市づくり部地域整備第一課 上野まちづくりのパンダ橋社会実験で岩倉高校と連携し、生徒が自発的に憩いの場を考え、利用者との対話する姿が印象的であった。まちづくりには地域への愛着が不可欠であり、こうした取組を通じた人や場所との繋がりがづくりは大変重要である。行政として学校と地域をつなぐコーディネート役を担い、持続可能なまちづくりの基盤形成にやりがいを感じている。</p> <p>○株式会社マザーハウス 私たちは途上国でモノづくりを行いながらも、店舗と地域とのつながりを大切にしてきた。千羽鶴活動への参加も、こうした思いを受け継ぎ、歴代の店長が継続してきたものである。生徒が自主的に議論し、自分の考えを発信する姿に大きな刺激を受けている。今後もこの活動が子どもにとって新しい世界との出会いや将来のキャリア形成のきっかけとなることを願っている。</p> <p>○NPO法人 903シティファーム推進協議会 学生の高い意欲に私たちも力をもらい始まったスクールファームプロジェクト。一人ひとりの主体性を重んじ、誰もが活躍できる場を創ろうとする姿勢に学びを得ている。地域や自然とのつながりから生まれる役割、関係性の醸成を通じて育まれる創造性を、これからもともに探究していきたいと考えている。</p>

活動の今後の展望

岩倉高校の総合探究および千羽鶴活動は、学校と社会をつなぐ新たな学びのモデルとして進化を続けている。今後はその波及力をさらに高める展望を描いている。最大のミッションは「社会とつながっている学校」を構築し、生徒が実体験を通して勉強や生活に目的意識を持てるような育成環境をデザインすることである。

まず、1年次のキャリア教育においては、東洋経済『四季報』掲載の12業界すべてを網羅した企業連携を目指しており、生徒が幅広い業界に関心を持ち進路選択に臨める体制が構築されつつある。さらに、2年次では起業プログラムの深化により、生徒による社会実装を視野に入れた取組が強化されており、企業主催のビジネスコンテストに参加するなど新たな挑戦が進んでいる。

今後の核となるのが「千羽鶴活動」を基盤とした生徒主体の起業的アプローチである。校内に生徒による活動窓口を設置し、自ら企画・運営する環境を整備することで、探究活動とビジネス的視点の融合を図る。活動資金の自立的確保やクラウドファンディングの導入も視野に入れ、実社会に近い形での経験を通じた学びを促進する予定である。

また、これらの動きに連動する形で、学校全体としてはアントレプレナーシップを醸成するプログラムの開設を視野に入れた準備も進んでいる。この新クラスでは、千羽鶴活動で培われた「探究×連携力」を土台に、生徒が課題発見力・価値創造力・社会との協働力を高めるカリキュラムを検討している。

活動の様子



「一歩踏み出す勇気が、未来を動かす」
自分たちの企画を企業の経営者に直接提案。実際のビジネスの視点からアドバイスを受け、企画が実現できるかどうかや課題を見直す機会となった。



「アフリカ・マラウイで生産されたフェアトレードの現地コーヒー」
パッケージのデザインは生徒が考案した。

活動の様子



「マラウイ産ドリップコーヒーパッケージデザインのコンペティション」
マラウイ産ドリップコーヒーのパッケージデザインをテーマにコンペティションを実施。
多方面からの評価を受けることで、新たな発想や改善点を得る機会となった。



「パンダ橋マルシェでの地域交流」
台東区およびJR東日本との連携企画として、上野を訪れる外国人観光客に向け、
日本の伝統文化の一つである折り紙を英語で紹介し、国際交流を図った。



「就労継続支援B型事業所『耕房 輝』とお麩ラスクの新フレーバーを開発」
同事業所と連携し、新しいフレーバーの開発に取り組む。試作と検証を重ね、
味覚や外観の改良を行いながら、理想的な製品の実現を図った。



「浅草橋いちょう朝市への出店」
マラウイと台東区をつなぐ取り組みの一環として、浅草橋いちょう朝市に出店。
海外からの来訪者も多く、英語での商品説明に取り組むなど、グローバルな対応強化にも挑戦。



「伝えること、その一歩が世界を近づける」
公益財団法人シーセフのスタッフとしてカンボジアフェスティバルに参加。会場設営、
ブースでの呼び込み、活動内容の説明、商品販売を通じて広報および普及活動を実施。



「紀伊國屋書店講演会プロジェクト」
電子機器普及による若年層の紙離れに対応するため、講演会を通じて書店の魅力を発信。
今年で3回目となる紀伊國屋書店との協働プロジェクトとして展開。

活動の様子

活動の様子



「ゴミになるものを、新しい価値を持つ道具へと再生する」
大手日用品会社と提携し、使用済み歯ブラシをリサイクルしたプランターを台東区へ寄贈。今後は台東区との協働を深化させ、地域住民を巻き込んだ持続可能な取り組みへと発展させる予定。